

Takeshi Kakehashi



Official fan club

Newsletter No.15



ご挨拶

梯 剛之

* 昨年の11月東京オペラシティでのリサイタル以降一層元気になりました。会員の皆さまの暖かなご支援が大きな力になり感謝しています。今年3月の宝塚でのリサイタルを皮切りに、北海道から兵庫まで各地でのリサイタルやコンサート、子どもに伝えるクラシックの活動が予定されています。5月にはオーストリアでヴァイオリニストとの協演に出かけてきます。皆さまに演奏で想いを伝えて行けるよう精進したいと思います。

* 僕のファンクラブ発足時点から長きに亘り、会長としてたいへんお世話になった堀井章さんがこの度引退されました。演奏家としての道程をずっと支えてくださった僕の恩人です。心から感謝しております。そのあとを山形の加藤秀明さんにお引き受け頂きました。色々お世話になるとは思いますが、どうぞよろしくお願い致します。



新会長ご挨拶

加藤 秀明

この度、堀井さんからファンクラブ会長を引継ぐこととなりました。堀井さんは、文字通りholly(高德)で音楽への造詣も深い紳士であり、ファンクラブの発足当初から会の運営にご尽力いただきました。しかし、健康上の理由から会長続行が難しいとのことであり、その後を私がお受けすることとなりました。微力ではありますが精一杯、務めたいと思いますので会員ならびに事務局の皆様、これまで同様よろしくお願い申し上げます。

さて、剛之さんは、約二年間、体調不良によりリサイタルやコンサートから遠ざかっておられましたが、昨秋の東京オペラシティでのリサイタル、続く横浜みなとみらいホールでのコンチェルトで完全に復帰されました。樹木の地上部分と根の体積は同じであるといいますが、樹が大きく立派に成長する前には、更に土中深く広範囲に根を張り巡らします。剛之さんにとって、ここ数年はそのような時期であったような気がいたします。昨秋のリサイタルは正に新しい境地での演奏であり聴衆に大きな感動を与えました。完全復帰を心から祝福しますとともに、その情熱と努力に改めて敬意を表したいと思います。

私は、13年前に剛之さんのピアノ演奏に魅了され、その後も、人生の折々にその音楽や生き方に感動したり励まされたり、また、多くのファンの方々とも知り合いになることが出来、剛之さんにはいつも感謝しております。このファンクラブは「梯剛之が大好きな」方々の集まりです。ファンとしての有りようは様々あると思います。「剛之さんのピアノを聴く、音楽に身をゆだねる、演奏会場で時間や空間を共有する、剛之さんを深く知る、生き方を見習う、ただ静かに応援する」等々。しかし、どのような形であっても「剛之さんの夢実現を願う」気持ちは皆同じです。これからもみんなで剛之さんを応援していきましょう。

目次

Page 1

◆ご挨拶 (梯 剛之)

◆ご挨拶 (加藤 秀明)

Page 2

◆対談～僕の今～

Page 3

◆対談～僕の今～

Page 4

◆対談～僕の今～

Page 5

◆対談～僕の今～

Page 6

◆対談～僕の今～

◆子供に伝えるクラシック活動報告

Page 7

◆寄稿 (町田市 松浦禎子)

Page 8

◆懇親会を開催しました

▼みなとみらいコンサート

▼宝塚ホテルリサイタル

◆事務局から

▼お知らせとお願い

▼最新CDリリース



♪今回は、今年から梯さんが所属された音楽事務所ソナーレ・アートオフィスの代表であり、マネジャーとしても梯さんを支えて下さることになった金子哲理さんとの対談をお願いしました。(事務局) ♪

金子 今日は対談ということですが、インタビュー的に幾つかお話を聞きたいこともあるので、色々お話をさせてください。よろしくお祈りします。早速ですが、5月にオーストリアでのヴァイオリニストとの協演が予定されていますね。これはどういうきっかけで実現したのでしょうか？



梯 そもそもは僕のウィーンの音楽仲間の女性が(今も音楽に携わっていて)僕のDVD「子供に伝えるクラシック・シューベルト編」をアレキサンダー・ダビッドというヴァイオリニストに見せたのがきっかけです。このアレキサンダーと協演するんですが、まだお会いしたことはないんです。30歳代前半で僕と同年代と聞いています。アカデミー(ウィーン国立音大)の

講師もしているようですが、その演奏を聞くとフィーリングが合うという予感がします。

金子 DVDが切っ掛けとすると、シューベルトやモーツァルトを演奏するのですね？

梯 はい、シューベルトのほかにベートーヴェンのクロイツェル・ソナタやモーツァルトのヴァイオリンソナタも演る予定です。

金子 今回は久しぶりの渡欧になるようですし、時期も良いですよ、折角ですからオーストリアの春を愉しんでいただきたいです。



梯 とても楽しみにしているんですよ。一気に気持ちが開放される時期ですからね。

金子 どこで演奏されるんですか？

梯 ザルツブルグから少し離れた町ですが、5月3日に町の小学校でその児童向け、翌日4日が一般の方々向けなのです。それと実は今回演奏するホールに、ウィーンの自宅で持っていたピアノのうちの一方、ベヒスタインが納められているんですよ。それもここで演る一つの切掛けで・・・だから余計楽しみです。

金子 ほう、それは嬉しいですね。この協演のきっかけが「子供に伝えるクラシック」のDVDということでしたが、剛之さんは、これをこれからの音楽活動の一つの柱として、置いて居るんですか？そうすることができた切掛けは何でしょうか？というのは、音楽に携わる人たちは皆、こうした活動をやりたいたいと思っても中々実現は出来ないという場合が大半ですから・・・。



梯 そうですね。それはとてもたくさんの方々の方々の協力があってのことですが、思い立った理由は三つあります。

一つは、0歳、13歳の2回、僕は眼の癌の手術を受けています。本にも書きましたが

(注：いつも僕の中は光/角川書店) 赤ちゃんの頃からずっと検査や手術器具の音に怯え、何をされるんだろうという恐怖と、実際の痛さで何時も大きなストレスを抱えていました。随分と泣いたそうです。特に13歳の手術の時などはもうしっかり意識がありましたからそれは辛かったです。でも音楽を聴くとその辛さを忘れることができ、また勉強をしたい、また立ち上がりたいたい・・・！！という気持ちが湧いてきました。音楽の力を感じるんです。それを知ってもらいたいのひとつです。

金子 音楽の偉大な力を、ですね。

梯 はい。二つ目は、子ども達と音楽への感動を共有したい、ということです。僕は障害者けれども、普通の幼稚園、小学校に行きました。みんなと一緒に山を駆け回り、田んぼの中に入って泥んこになったり、鳥を抱いたり・・・という、命を感じる機会が多かったんですね。

金子 その頃の八王子は自然がいっぱいでしたか？

梯 そうなんです。自然がたくさんありました。そんな中で同い年の友人と遊ぶようになって、自ら手で持って見たい！という感情も生まれて自然の中で能動的に動くようになりました。(手術や検査など押さえつけられることの多かった) 大人に対する拒絶反応のようなものがありました、→3頁へ

→友達の中で過ごせたことで幸せ感がありました。そういう記憶もあって、子どもの声を聞くだけでハッピーな気持ちになります。

もう一つは、今、新聞やテレビで、子どもの自殺やいじめのニュースが多く聞かれます。この問題に対して自分が何かできないだろうか・・・という思いがあるのです。それも思い立った直接的な動機ですね。自分自身にも色々不安があって、人間関係に疲れたり、傷ついたり、裏切りがあったりという中で、音楽は裏切らない、と感じるのです。音楽を聴いて落ち着くとか、気分転換になるとか、それだけでも違うのではないかと。

金子 確かに音楽は特別な力を持っていますよね。この「子供に伝えるクラシック」への剛之さんの想いがわかる気がします。少し話題を変えますが、20年くらいオーストリアで暮らしていらっしゃいましたね。この道をベートーヴェンが、或いはシューベルトが歩いた・・・と言った歴史的な場所が沢山あると思うのですが、そんな中でどのような音楽をよく聴かれましたか？



梯 母が声楽の出身ということもあって、シューベルトの歌曲をいっぱい聴いていました。フィッシャー・ディスカウなどは常に感動して聴いていました。シューベルトは特に、向こう（ウィーン）に行って慣れない生活の中で、その世界観が何か懐かしさを感じさせるものでもありましたね・・・。



向こうの冬は長いですから、実は鬱になるような人も多いらしく、その分、春になった時の喜びは大きいわけですが、その他にもハプスブルグ王朝の封建的な空気の中に居て、彼の魂は馴染めなくて苦しんでいたと思うんですよ、魂の平安を求めてさ迷いながら音を捜していたのだと感じます。

金子 ウィーンに住んでこそその理解ですね。剛之さんは1990年に留学して1998年にロン・ティボー国際コンクールで2位になりました。このコンクールが今年で創立70周年を迎えますね。その入賞者にその記念冊子の原稿を依頼された・・・？

梯 はい、もう既に出ています。

金子 創立者のジャック・ティボーについてはどのように感じています？

梯 それはもう、オペラ界でいえばプリマドンナのような！という感じ、というんでしょうか。

金子 お好きなコルトーとティボー、カザルスで三重奏団を結成していますね。

梯 ええ。僕が気持ちの良くなる呼吸と空気感をティボーとコルトーは持っていますし、カザルスも大好き！ ウィーンに行って言葉もレッスンも厳しくて、現地の日本人学校でもちょっと苦労して・・・集団からシカトされたのは初めての経験で・・・カザルスに救われました。

金子 シカトという言葉も知っている？

梯 はい(笑) そんな時に聴いたカザルスのブラームスに感動したことを憶えています。カザルスとホルショフスキーの協演も素晴らしくて、感動した一つです。

金子 ジャンルを問わずに言って、特に好きな音楽家は？

梯 オペラ歌手で言うとマリオ・デル・モナコの声にはハマりました(笑) その声をピアノで表現できないかと思ったりします。オペラ歌手も凄い人はシンフォニーを聴くかのようです。ヴァイオリンやピアノも時として特定の楽器の限界を超えるところがあったりもしますし。またシューベルトではエリザベート・シュワルツコップですね、赤ちゃんの時から聴くと泣き止んでいたようです。シュトラウスの「四つの最後の歌」も、覚えているわけではないんですけど同じように泣き止んでいたらしく、今聴いても胸にこみ上げるものがあります。



金子 四つの最後の歌ですか、地味な曲ですねえ・・・それがわかるって、もう赤ちゃんじゃないです(笑) 最近ではバルトークのオケコン（バルトークの管弦楽のための協奏曲）に救われたと伺いましたが・・・？

→梯　ほんとそうなんです。僕はずっと演奏に対する劣等感と知名度のギャップに悩み、それを去年まで引きずっていたんです。それが酷くなった一昨年はピアノを弾きたくない・・ウィーンも忘れたい・・という闇の世界に入り込んでいたくらいです。



金子　そこまで苦しんでいた・・・

梯　はい。そんな中でバルトークの音楽は蛙の声や風の渡る音、田園風景などを想起させるところがあって、救われるようでした。



彼は第二次世界大戦のとき、ナチによって破壊される中欧に居たわけですが、その軍事演習を見て、武器や戦車など機器の音に対してアレルギーを起こすほどだったと言うんですね。発電機のモーター音にも異常に反応したらしいです。

僕も赤ちゃんの頃から、検査機器の中で器具の音や電磁のうなりの中で大人に押さえつけられてとても辛かったのが、共通する感覚もあるのでしょうか。今の僕は、小沢征爾さんがボストン交響楽団で最後に振った時のバルトークがとても好きですが、日本に帰国した後すぐはクーセヴィツキ指揮のCDを聴いて立ち直って来ました。自分の中で共鳴しました。

金子　共鳴ですか・・長く住んだウィーンと（バルトークの育った）ハンガリーが中欧として近い、という地勢的なことが関係していますか？

梯　んー、関係はあまりないと思います。自分の中に既にあった感覚ですね、きっと。ヨーロッパの感覚はありますが、ウィーン（の感覚）とも異なると思います。

金子　なるほど。

梯　バルトークは第二次世界大戦、アメリカへの移住、病気などのために、暫く作曲をしていない時期がありました。彼の音楽はこの時期からまた変化してきているんですよ。心を閉ざして闇の中に居る、そうした中で依頼を受け、自分を解ってくれている人がいることで救われて来ているのではないのでしょうか。

僕にとって、悔しい時、破壊的な感情になったとき、バルトークはその悔しさを代弁してくれて心の薬になりました。絶望的な悲しみの中から、希望を見出していく・・このプロセスを、バルトークに教えてもらったと思います



金子　それが自身の生活の中に生きた？

梯　そうなのです。立ち直る道程で、アフリカの太鼓を習ったのですが、そこに日本の盆踊りにも通じるものがあるのがあって、人間の音楽の原点を感じました。徐々にポップス、ジャズ、歌舞伎、雅楽などの日本の和曲までも共通点を見つけるとピアノで表現して、とても楽しくなったんですね。何か感情を表すときに本能的に発した声や思わず出た口笛が発展して行って音楽になって行った・・という原始的なところに再び気がついてきたんです。

金子　音楽の力・・癒すというより、一歩も二歩も踏み込んで人生を変える力があると僕も思います。剛之さんは、想いを表現する、から、音楽は綺麗、楽しい、慰める力もある、ひいては人生を楽しむ・・そこから一歩踏み込んで人生を変化させる力がある、と伝えたい？

梯　仰るとおりです！

金子　その想いを表現するという部分、お客様と想いが一致したと感じられたときはどんな感じ？

梯　言葉に表せないほど嬉しい！ひたすら孤独の中で伝えたいものと向き合い頑張ってきて、終わった瞬間に（一致した感覚が持てた時は）精神も身体もすべてが開放された！という感じです。

金子　そうですねえ！聴き巧者・・つまり、日本では、歌舞伎などを大いに愉しむ「観巧者」という言葉がありますが、“聴き巧者”という意味ではヨーロッパが一番でしょうか？

梯 沸いたときの沸き方がすごい。

金子 日本は行儀が良いですね。

梯 ヨーロッパなんかは、演奏中にお客さんが喧嘩始めたりしますもんね。

金子 立ち上がって、くらいの勢いでしょう？

梯 そうなんです。一度楽友協会で“俺はこの演奏には納得が行かない！”“いや、これはこれでいいんだ！”なんて喧嘩していたことがありました。ウィーンはそういう意味で黒白がはっきりしていますね。

金子 私はパリのオペラ座でブーイングの体験をしたんですよ。気に入らなければ気に入らないでそれをしっかり表現するんですね。

梯 ウィーンに限らずですが、音楽家が置かれている状況は、常に厳しくて、独特の緊張感の中で試されているというわけです・・・。

金子 確かに・・・一方的でないものにしないと・・・演奏家が弾きたいものがありますね、一方お客様が聴きたいもの、どちらかといえば、知っている曲が入っていたほうが安心する、ということもあります。

演奏家はおお客様の要望に応えたい、と希望しながら、想いを伝えたい！感じてよ！という思いを持って演奏する・・・双方で擦り合せしながら納得出来る部分を現場で探っているという感じでしょうか。

梯 そういうことになりますね。これが中々難しい・・・僕も天邪鬼なんで(笑)時として、演りたい曲を主催者側がこれは難しいかもしれないから変更してくれ、ということがあるんですが、それじゃあ逆に「イイネェ！」と言ってもらおうじゃないか、と反発する気持ちが生まれるんですね。で、挑戦することになると、それは最初の一音からお客様との綱引き状態になって、弾き進むにつれてその関係が変わって行くわけですが・・・一つになれたときはこれ以上ない幸せ感があります。



金子 その意味では、昨年11月27日オペラシティでの演奏会はその緊張関係がすごく、スタッフとして舞台袖に居てもビリビリ感じるほどでした。演奏が進むほどに聴衆の方々と溶け合っていて、素晴らしい空間を創りました。

梯 ええ、それは本当に嬉しかったです。！！

金子 さて、そろそろ紙面もいっぱいになりそうなので改めて伺いますが、剛之さんはこれからどのような演奏家を目指して行きたいですか？

梯 言葉にするといっぱいになりすぎるか・・・一言になるか(笑)

演奏はその人の鏡だと、最近本当に思うんです。音楽自体にも喜怒哀楽があると思うのですが、自分の生き様を含めて人生の喜怒哀楽を表現して行きたい、と思います。日頃聴いて居る曲でも「こんな魅力があったの!？」と云われるような演奏がしたい、ということでしょうか。

金子 ぜひご自分の描くものに近付いて行っていただきたいです。最後になりましたがファンクラブの会員の方々に一言お願いできますか。



梯 はい、会員の方々にはこれまでご心配をおかけしましたが、ずっと支えて頂いて、本当に感謝しています。マタイ受難曲などを聞いていると、最初どろどろした思いから徐々に神の赦しを得、感謝の思いに到達する、という魂の流れを感じます。僕の実際の暮らしや活動についても同じことが云えて、自分では途中幾つかお話したように、いろんな想いがあって辛い時期を過ごしてきましたが、闇の中から光を見出せたのはやっぱり音楽があったからこそで、会員の方々がそれを待ってくださっていたこと、演奏を再開してお客様との(精神を)引き上げたい⇄引き上げられるという経験を通じて、とても大きな感謝を感じずにはなくなりました。

→6頁へ



→金子 ありがたいことですねえ。お客様は勿論ですが、このように会員の方々からの心からの支援を感じるファンクラブに僕は出会ったことがありません。素晴らしいと思います。

梯 いやあ、ほんとそうなんです。今までヨチヨチしながらここまで来ましたが、何時も暖かく見守ってくださって……。新たな会員の方々も、暖かな方々ばかりです。身にしみて有難いです。これからまた一層、感謝の気持ちを忘れず、演奏でその想いを伝えて行きたいと思います。

金子 僕もこれから様々な感動を共有していきたいと思います。今日は色々なお話が出来楽しかったですね。これからもよろしく願いいたします。

梯 あっちこっち、話も飛んじやいましたが(笑)僕も嬉しかったです。こちらこそ、よろしくお願い致します。



§ 編集後記 去る2月26日、梯さんのスチール写真撮影現場で1時間ほど頂いての対談でした。
 § 金子代表は、大学を卒業以来クラシック音楽畑で企画・制作・プロデュースをはじめとした
 § 様々な素晴らしい実績をお持ちで、業界でもお名前が浸透している方です。今は音楽事務所の
 § 代表としてもお忙しい毎日。慶應義塾大、昭和女子大などいくつかの大学の講師、各地での
 § 講演なども行って居られます。終始笑いの絶えない和やかな雰囲気の中で貴重なお話が噴出。
 § 誌面（編集能力?）の都合上勝手ながら愉快的言葉やお話も沢山割愛させて頂きました。



♥♥【子供に伝えるクラシック】×CCC（福島・飯舘村への心のケア支援団体）活動協力♥♥

飯舘村は2011年3月東日本大震災以降間もなく、東京電力福島第一原子力発電所事故により全村避難を余儀なくされ、その村民のうち約8割程度が村が準備した福島市に点在する避難先で避難生活を送っています。小学校、中学校ともに福島市飯野町のご厚意で既存の学校に寄宿し学校生活を送っていましたが、昨年4月に小学校が、次いで8月27日の第二学期開始時に中学校が開校しました。念願の“自分たちの学校”です。梯さんはこの開校をお祝いして、CCC（Cocoro Care for Children※）協賛で開校記念演奏を行いました。

演奏曲は ドビュッシー 水の反映、運動 とショパン ノクターン第1番、アンダンテ・スピアートと華麗なる大ホロネズ。演奏は梯さんも生徒さんたちの心や想いに寄り添うというCCCの目的を理解し、少しでもクラシックが楽しめるよう、曲の解説をしながら演奏。最後の華麗なる大ホロネズを演奏するにあたっては、ショパンが祖国の復活を願い、熱い思いで作曲したことを語り、飯舘村の復活を願っての演奏は会場を熱気に包みました。

梯さんの、生後一ヶ月で光を失い、それでも絶望することなく、音楽を極める道に進み世界的に認められる音楽家となった姿を間近で見聞きすることで、生徒さんたちが前向きに生きる希望や勇気を感じてくれたら、とのCCCの想いと、演奏を通じて生徒さんの心に何かを感じてもらい、という協力の意味が達成され、何よりもこのころのケアになったと村側からも評価をいただきました。



※CCC（代表 出口貴美子氏）は東日本大震災の直後から福島県の被災地に入り医療活動を開始した、医師を核とした“こころケア”を目的とする任意の被災地支援団体です。（記事：星田啓子）

♥今回は、十数年来の会員の松浦禎子さんにご寄稿頂きました。今のお気持ちをしたためて頂くと同時に、長年続けておられる短歌の歌誌「地中海」2001年6月号に寄せられたものです。お名前の挙がる柳澤桂子さんは、梯さんの尊敬する科学者であり、歌人でもあります。11月のオペラシティには、そのお嬢様が聴きにいらして下さったそうです（事務局）♥

梯さんの復活を祝福して

（町田市 松浦 禎子）



昨年暮にファンクラブの事務局の方との連絡の機会があり、用件後のお話の中で私が十数年前に梯さんについてのエッセイを書いたことなどに話が及び「ぜひ見せて下さい」とのことでしたので、拙い一文を載せていただくことになりました。梯さんの演奏会には、はじめの頃より通わせて頂き今日に至っております。一昨年来の梯さんご不調のことは先ごろの朝日新聞夕刊の記事や、NHK夕方ラジオのニュースの時間にご本人がこの番組を通してファンの皆さんに復活を宣言なさったことにより、なお一層心にしみて理解することが出来ました。

衝撃的なデビュー以来十年余りご本人の苦悩と体力的に限界まで達するようなご不調のことを想像することさえ私自身にとっても苦痛なことでした。無我夢中に過ごされた年月も、失意のどん底で喘いだ月日もきっとこれからの梯さんの人生の礎となることでしょう。この上はこの経験を充分に心に秘めて、何よりもお身体をお大切に、そしてこの大きな壁を乗り越えられた精神の高みを演奏会でお示し下さいますよう心よりお祈り申し上げます。

○いのちの音○ [2001年歌誌“地中海”6月号より]



“磨かれし星が触れ合いなるごとき寂しい音をいのちはてたる”

生命科学の柳澤桂子さんの一首である。昨年暮れ近く柳澤さんとピアニストの梯剛之さんが対談したNHK特集の番組の中で披露されたものである。柳澤さんは原因もわからぬ難病に冒され、研究途中でたおれられて長い病床生活を余儀なくされた方の由。かたや梯さんは生後まもなく小児ガンのため失明し、その後も再発、手術という運命をきり開いてきた青年である。

2月28日サントリー大ホールはほとんど空席なしのファンで埋めつくされていた。私は今回が三度目のコンサートであったが、彼が例によって黒子役のお母様とステージへ上がってみえたときにもう涙がぼろぼろ。これでは勝負の前に降参しているようでわれながら情けない。勿論音楽に関してはド素人の私が技巧がどうのテンポがどうのと聴くわけもなく、ただ素人にも聴きわけられる彼の繊細であたたかな音色にひたるだけで充分なのである。そしてこの会場に流れては消えてゆくその音色を奏者と聴衆が共にわかちあえるこの空間、この時間はまことに一期一会とのおもいに駆られて聴いた。最後に弾いた「英雄ポロネーズ」が終わったとき、それまではただただあたたかい思いのこもった拍手が続いた中で一階右手から「ブラボー」と二声三声きこえてこの奏者への感謝の気持ちとはげましの気持ちが強くこめられていた。私は彼の多くのファンがそうであるように、彼が盲目のピアニストであるということにおどろき感動した全くのミーハー的なファンに過ぎない。しかしこの青年がこれまでに辿ったであろう苦難の道のりを想像するとき、これが感動でなくて何であろう。

私の友人はとなりの席からオペラグラスで彼の指の動きをみている。「彼の指は鍵盤の上で軽やかに踊っているみたい。前かがみになって体重を乗せることもない」と云う。勿論楽譜も鍵盤も見る必要がないから顔はまっすぐをみたまま体もほとんど動かない。演奏の始まる前、私は彼が昨年ショパンコンクールに挑戦したときの一次予選および二次予選のCDを買い求めた。その一次予選での最初の曲「エチュード イ短調」のほとんど弾きははじめのとき、次のフレーズに移る前の瞬間に一音が“ポン”ともれるのである。これがテレビでの解説にあった一音であった。彼は目のかわりに指で触れて鍵盤の位置を確かめる。それは位置を確かめるだけで音は出ないはずだったものを——。そこはショパンコンクール、どんなにか緊張していたことであろう。演奏会のあと私はこのCDを幾たびか聴き、盲目であると云えば彼は不満であろうけれども、それ故の彼のいのちの音として聴きたい。それは又最初にあげた柳澤さんの一首とも響き合っているように思う。（了）





横浜みなとみらいホール 神奈川フィルとのコンサートと懇親会

昨年12月22日（土）クラシック・ヨコハマ“若い命を支えるコンサート”が開催され、神奈川フィルハーモニー管弦楽団演奏会で梯さんがショパン・ピアノ協奏曲第1番を協演されました。指揮者の高関健氏に想いを託し、気持ちよく演奏させていただいた、と仰って、私共聴衆もその演奏に涙すると共に、これまでのお辛い日々から本当に復活されたのだと感動を共有しました。

その後コンサートにお越しの会員うち有志の方々が懇親会を開催しました。26名の方々が集い、梯さんを囲んでの気楽な懇親会を持たせていただきました。今回新会長に就かれた加藤さんとは駄洒落の応酬という場面も見られ、初めてのご参加の会員の方も、とても久し振り仰る方も楽しく賑やかな会合になりました。（写真：野崎晴美）



宝塚アーティスト協会主催 宝塚ホテルコンサートと懇親会



今年3月9日（土）兵庫県宝塚市内のホテルで 梯 剛之さんのピアノリサイタルが開催されました。定員200名を越す大盛況の中、モーツァルトのロンドとピアノソナタ第5番そして梯さんが初めて演奏されるリストのピアノソナタ、優しく美しいモーツァルトとは対照的な激しい思いをぶつけたり 時にはしっとりと甘い思いがにじみ出るような素晴らしい演奏に観客の心はすっかり感動の渦に巻き込まれて涙する人の姿もありました。アンコールはリストとシューベルト、組み合わせの妙にファンは魅了されました。

夕方からホテル内のウィーン風レストランで40名のファンが集いました。聖母学院理事長廣岡洋子先生のご挨拶と、お父様から新しいマネージャー金子哲理氏のご紹介があり、嬉しいことに「このファンクラブは他とは全く違って素晴らしい！ 私も一会員になって剛之君を応援したい」と心強いコメントを頂きました。歓談は尽きず二次会にも及び名残を惜しんでの散会となりました。（記事：古家峰子 写真：木田智滋）



【事務局よりのお知らせ】



1 年会費更新の再開について

この1年強の間、体調面から梯剛之さんの音楽活動がほとんど無かった為、年会費の更新を中止していましたが、別紙の公演表のように本格的に活動を再開されましたので、新年度（4月）より年会費を徴収させて頂きたくお願い申し上げます。なお、昨年4月以降会員になられました方に就きましては今回の新年度分に充当させていただきます。

2 新しいCDのリリースについて



昨年11月東京オペラシティでのリサイタルが【水の反映】とのタイトルでアートユニオンより発売されました。

内容は、ドビュシー「水の反映」ショパンのノクターン8, 9, 20番、ソナタ3番、モーツァルトの変奏曲イ短調k.460です。定価2,500円（会員斡旋価格2300円）ご希望の方は事務局（TEL/FAX 042-637-6489）までお申込み下さい。

3 梯剛之さんWikipedia最新情報、演奏会予定、7月北海道ツアー案内を別紙にて同封しました。

会報へのご寄稿を募集しております。コンサート感想、エッセイ、写真など、会員向けの記事や写真を、常時受け付けます。会員の皆さまで作る会報を目指したいと思います。

編集発行 2013年4月吉日

梯 剛之オフィシャルファンクラブ事務局

〒192-0913 東京都八王子市北野台2-10-5 山中 重夫 方

HPもご覧ください。

<http://kakehashi-takeshi.com/JA/index.html>